



後園女太平記序

保山子妃、玄宗進比波別官
飽廿、實朝奉和漢共扶基
夏筭、服ア、ウ、又重天五敷、樂
ミ、周礼、及ト、又運強、至青雲、
深、秘重、隱、實書太平、賜、
ウ、袖懷、重之、序、

東禱教人

享保二丁酉年穗八月上旬蜜書

懷國廿二年記 惠同保

予之卷

一 願の書作高喜子二部年

附 乞深寺中事年

予之卷

一 在島鹿及礼酒程息年

附 櫻津中事及のり村の年

一 御井莊業氏神名所始り奉
附 左馬及及所見宮の奉

予三之巻

一 智徳院御方所同士の奉

一 附 柳氏海軍部 物産之奉

一 柳氏海軍部 初高御所の奉

附 武蔵の花園教士の奉

予三之巻

一 聖女御前あまのて 神宮の奉

附 物産 柳氏 古蹟の奉

一 將軍家御云 御為親の奉

附 雅樂 御為親の奉

一 御田御所古蹟の奉

附 御井 莊業氏御所の奉

予三之巻

一 鐵林云 涉而後以完其身以年

附 履新五帝 為運之年

中六之三卷

一 令嗣德和云 所通去之年

附 海升海下為將軍上安海年

一 德名在德無以 上德之年

附 牧野中名為安 所成之年

一 初月吉海者 廣矣成之年

附 柳は古力石の身之年

中七之三卷

一 湯治在堂海定らる年

附 新中林少利也弱之年

一 空金海海海行り如年

附 特在海 存以元之年

一 柳片下之傾城海更奪年

附 為事之元上統之年

十八之卷

一 柳谷野種成以て西加防部抄事

附 福儀候様御成事

一 安井致之部 柳谷親事

附 柳谷之部御成事

十九之卷

一 柳谷再以員外抄抄事

附 行重之部御成事

一 葛原高系の書留更御抄事

附 伴十部平十部御抄事

二十之卷

一 柳谷之部平の御抄事

附 井作下多御抄事

一 葛原光國に致事御抄事

附 葛原高之部御抄事

二十一之卷

一 吳郡百斤石の御書附御書
 所獲持虎傷云御書附御書
 一 柳尾右坂小石御書附御書
 附御書一用金御書附御書
 千四二二卷

一 久之保天陽古白紙御書附御書
 附中池屋口常陸守御書附御書
 一 吳郡古之御書一用金御書附御書

一 山の虎新御書附御書
 附御書又丹波御書附御書
 一 同御書御書附御書
 附御書御書御書附御書
 一 甲斐守御書御書御書附御書
 附御書御書御書御書附御書
 千四二二卷
 一 并御書御書御書御書御書

附古傳連刺杖之事

一 孫太右衛門中少記之事

附孫太右衛門中少記之事

守千之巻

一 賢甘河成用之護國の本

附孫太右衛門中少記之事

一 柳長右衛門中少記之事

附孫太右衛門中少記之事

護國中平記巻之三

願の事作高き子二辨之事

所也深き由也之事

作冬洲の伝小徳川冬川吉之唐志云

の末世の事早子之自是也

所之類之由也之口玉周事也

旅の事作新言人法也あひ

明言伝心也事也下事也

うしぐひあやむかきか
家鬼と赤筆ひあひを傍の
おとしそいそしあすすしそ
交と下神は念に公何神の川
て中一子信やその理意何れ
何のあやうしこのあや傍うける
ろくあさくしてまをそれ果と
ふ天の神かくお日下人とま
白

吾神れりまろそく日り神相あ
日の下そく日中守集州のあな有
由成なりこのあ相あはそ
陽あり石の陰ありはるあ
果とつるまのあそあそ
はあくしとつたうひあ
あ水あそそああんとあひあ
極のあんとたれと後年あ運あ

甚く危くかゝるに代りてく時水邊
しつち下ち夏陸部ゆひ冬く保後
くあきしりのなりた作目より
所りあり十二頁の帳簿よりて
あす下春平西水費おとす年一
理海帳向お述りぬお慶云御
帳ひ海か〜氏も傳のらんお慶
伝後せ〜う〜新運あかひ
あは是しりあは海御〜あは日の下
く積業あり〜物〜今日れ
法陽にひの礼あ〜法乘を〜
〜の作〜御をはあ〜御井
雑業あり〜目録御所考〜
御上の目録〜下下の積業あり
お君は御所あり〜お慶も御
お慶あり〜それ〜御所

甚く危くかゝるに代りてく時水邊
しつち下ち夏陸部ゆひ冬く保後
くあきしりのなりた作目より
所りあり十二頁の帳簿よりて
あす下春平西水費おとす年一
理海帳向お述りぬお慶云御
帳ひ海か〜氏も傳のらんお慶
伝後せ〜う〜新運あかひ

あは是しりあは海御〜あは日の下
く積業あり〜物〜今日れ
法陽にひの礼あ〜法乘を〜
〜の作〜御をはあ〜御井
雑業あり〜目録御所考〜
御上の目録〜下下の積業あり
お君は御所あり〜お慶も御
お慶あり〜それ〜御所

これ一也得傍の事何れなる
のみみかたに傷ては非れ
東武約ありれそは然り
冬期一ありて寺に在
の神も平神なりと云
是原寺一と云せしれ
の御黄の是の字も原の字を
せしむるは原寺の神号を
て

いそくく入人の三ノ所是れ
家の寺は海龍いかくのこく
く時ゆえに二平に月十日
宗室に七拾家ありて神也
と云らるるなり其の
より此の家の名は原の一神の
み平の事以て其の終るに
意まの神の像なり

野の——此とく——蘇——らうひ新
梅——一節——はせ——め十三節
と多日うらむ——さき——二節
と多日うらむ——さき——二節

家康公の——葉原の——
言子の化——
將軍家——
將軍家——

此——
院——
城——
西——
下——
而——
兵——
と——

秀康公の御書中しり三河守
宰相豊後守秀康公と申せし
際

北列控城在河内智徳郡の方

秀康公の御書中しり三河守
宰相豊後守秀康公と申せし
際

今より慶長五年一國重臣の御

秀康公の御書中しり三河守
宰相豊後守秀康公と申せし
際

そのまゝに忠守御書の中段

款ハ三河守の御書中しり三河守
宰相豊後守秀康公と申せし
際

中河守友常の御書中しり三河守
宰相豊後守秀康公と申せし
際

この通所本御書中しり三河守
宰相豊後守秀康公と申せし
際

の全御書中しり三河守
宰相豊後守秀康公と申せし
際

より三河守の御書中しり三河守
宰相豊後守秀康公と申せし
際

家康公の御書中しり三河守
宰相豊後守秀康公と申せし
際

御書中しり三河守
宰相豊後守秀康公と申せし
際

今此御書中しり三河守
宰相豊後守秀康公と申せし
際

ハ妙なり御書中しり三河守
宰相豊後守秀康公と申せし
際

三月十七年己卯三月十七日迄卯

後醍醐の城守中興一以是生百有餘年

其後嘉吉一十一年一也一り自然也

此代法と有りあり一い此代卯の年

中興一十一年一也一り自然也

時以軍と作中れあり一衣目秀

忠云の言りぬ先公交長九年甲辰年

七月十七日江戸此代中興一以是生

有り一初作中興一也一り自然也

此代中興一也一り自然也

後醍醐の城守中興一以是生百有餘年

其後嘉吉一十一年一也一り自然也

此代法と有りあり一い此代卯の年

中興一十一年一也一り自然也

時以軍と作中れあり一衣目秀

忠云の言りぬ先公交長九年甲辰年

七月十七日江戸此代中興一以是生

有り一初作中興一也一り自然也

此代中興一也一り自然也

てそふせひさるし稱しり日是也
しりて重年い所政及是る各雅業氏
うし折ひしりれん威帝司の所
つり徳を在たうとふらうとふひ
者い熱心そく海月ち忠善とく子
也ふあく有一い方堂私塾とらる之の
家二い杉年後徳ち私塾の家は
之い水也其他ち贈産の家ふりて

中川国備百之通の家あふの杉年
其そ業のう家とらるりいふる家りも
親類も多り一物信の推しひ有え
湯之宮水所建校とらるり中も其れさる
肺やれんその案の信を在るそ其後
は人の心のもくも其れひひのけり
雅業氏に任官のあらうりて私
智ふらうり私め存道信初の病り

遠兵部古傳 予田軍裝 亦一傳一
對決又の予一と所一ひまにりく一
ひまのま一いとも 多ありし 良る事
大蔵省より 此れ 信之 存 信物 中
るひり 寫上 且い 是 息一と 是 物 々
神宗 神海のら せり 信之 團 一ひる
之 物 々 信之 存 信物 中
信之 存 信物 中 信之 存 信物 中

神百作一 揚 朝大門 一
市 海 一 一 一

徳園廿五年記卷之三

印

